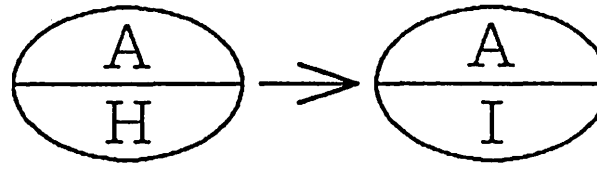
防御システムからみた「民衆語源」

高 橋 顕 志

はじめに

意味《A》と語形［I］が結びついていることば（以下《A》＝［I］のように表記する）が存在するところへ、新たな恣意的結合《A》＝［H］が侵入しようとする場合について考えよう（図1）。

図1



言語地理学では、ことばの変化要因を、多く言語外の社会・経済・文化の力関係に求めた。つまり、この場合、新たな恣意的結合《A》＝［H］の背後に、なんらかの言語外的「威光」が存在し、その「威光」によって、《A》＝［H］が《A》＝［I］を駆逐していくと考えた。

しかし、目を転じ、傷つき・倒れ・死滅していく側について見ると、もともと《A》＝［I］は単独で存在していたのではない。意味《A》は、《A'》《B》《C》・・・とのかかわりから、語形［I］は、［I'］［J］［K］・・・とのかかわりから、語彙体系を構成するひとつの要素として、その位置を占めていたはずである。この《A》＝［I］ということばが語彙体系の中から消えてしまうことは、ただ、ひとつのことばが消え去っていくということだけではなく、語彙体系そのものの再編を誘発する。

さらに、ひとたび新たな《A》＝［H］が侵入すれば、意味《A》は、《A'》《B》《C》・・・とかかわりを持ちながら、また、語形［H］は、［I'］［H'］［J］［K］・・・とかかわりを持ちながら、その語彙体系を構成するひとつの要素として、その位置を占めていくはずである。この《A》＝［H］ということばが語彙体系の中に参入することは、ただ、ひとつのことばが参入するということだけではなく、語彙体系そのものの再編を誘発する。

私は、伝播をはばんできた要因を、言語内のものに求めるという立場に立つ。つまり、従来この学問で言われてきた、自然地理的境界線や人文地理的境界線のような言語外のものにその要因を求めるのではなく、その要因を、言語の側に、そしてその使

用者たる人間の側に、防御のシステムとして求める。新たなことばの侵入による語彙体系の再編をなんとかくいとめよう、また、なんとか小規模なもので終らせようと、さまざまな防御メカニズムが働くと考える。

従来この学問では、民衆語源、混淆、言語治療、同音衝突、類音牽引などと呼ばれてきた類型に注目してきた。私は、これらを、上に述べた防御システムのさまざまな発現のありようだと考える。そして、これらを、そういった視点から、その具体的発現のメカニズムとともに、統一的に説明したいと考える。さらに、その防御システムの本質に存在する「言語」と「人間」について考えたいのである。

小論では、その中から、「民衆語源」と呼ばれている現象を取り上げ、その発現のメカニズムについて考察し、その作業の中から、「防御システム」の本質に迫ってみたい。

1　伝播とは

伝播をはばんできた要因を考えるために、伝播のメカニズムについて、やや詳しく見ておかねばならない。

－1　伝播の芽

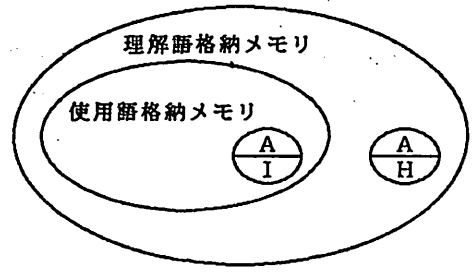
我々は、経験によって言語を獲得する。母親の手に抱かれたときから言語獲得が始まり、さまざまな試行錯誤ののち、言語体系を確立する。そして、さらに、生涯を通じて新たな経験を繰り返し、その中で言語体系が更新されていく。環境からの経験が、言語を強制するのである。ところで、それぞれ、人の顔形が違っているように、獲得した言語もどこか違っている。まったく同じ環境で、まったく同じ経験を生涯にわたって続ける人間はいない。結果、自分と対話する相手は、必ず自分とは違うことばを持っていることになる。大きく見れば同じ言語を持っていても、ことばひとつひとつに降りていけば必ずどこかに違いがある。

一方、言語はコミュニケーションのためにのみ第一義的に存在するから、その宿命として、どこか違うことばを持った相手と対話しなければならない。その、微妙なことばの差に気が付かず、無事にコミュニケーションがはかられる場合もあるが、その差に気付かされる場合も多い。自分だったら意味《A》を表現するのに語形［I］を使用する。しかし、相手は《A》のことを［H］で表現した。ここで、図1のような衝突が起こる。このようにして、人は自分のとは違う意味と語形の恣意的結合の存在に気が付く。この段階を「伝播の芽」が生まれた段階と考えることが出来る。

－2　理解語としての格納

自分の語彙体系の中にない新たなことば《A》＝［H］は、ほとんど、場面や文脈で理解することが出来る。どうしても理解できない時には、その場で相手に尋ねる。また、第三者に聞いて確認する。辞書を調べる。こうして《A》＝［H］は、語彙体系の周辺部に存在する「理解語格納メモリ」に格納される。この時、語彙体系の中心部に位置する「使用語格納メモリ」には依然として《A》＝［I］が格納されている（図2）。

図2　語彙体系



－3　「理解語格納メモリ」から「使用語格納メモリ」への移行

「理解語格納メモリ」に登録されたことばは、その「威光」（注1）が強い場合、「使用語格納メモリ」に移され、発話のチャンスを待つ。一方、《A》＝［I］は、しばらく、「使用語格納メモリ」に共存するが、《A》＝［H］の勢力の伸張とともに、やがては「理解語格納メモリ」に移される。さらには、語彙体系の中から消え去ってしまう場合もありえよう。

ところで、「理解語格納メモリ」に登録された新しいことば《A》＝［H］は、そのすべてが、「使用語格納メモリ」に移行するのではない。

理解語として格納された段階で、「威光」と防御システムは熾烈な戦いを行なう。人の体の中に病原菌が侵入したとき、病原菌と白血球を中心とした防御システムが熾烈な戦いを行なうのと同じようにである。いわゆる潜伏期間と呼ばれる段階である。

そして、その防御のシステムをクリアできたものだけ「使用語格納メモリ」に移行することができるのである。

－4　伝播の完成

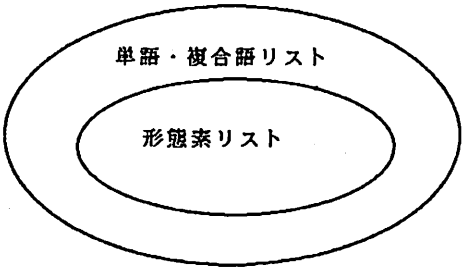
伝播が完成したことを経験的に確認できるのは、その人が、その意味《A》で、その語形［H］を第三者に対して発話した瞬間であると考える。理解語として格納した段階で伝播が完成していると見ることもできようが、経験科学である言語学では、この時点をもって完成するとみるべきである。さきの比喩をすすめて言えば、発病した瞬間に伝染が完成すると考えるのである。

従来の言語地理学で言及されてきた「伝播をはばむもの」とは、曰く、自然地理的境界線であり、曰く、人文地理的境界線であった。「交通」の途絶える地理的境界線にそれを求めたのである。「交通」がなければ伝播の芽そのものが生まれないからである。しかし、伝播の諸段階を上のように考えれば、この分析が表層的なものに終わっていることが明らかとなる。伝播の第三段階「理解語格納メモリ」から「使用語格納メモリ」への移行の段階で、伝播をはばむさまざまの防御メカニズムが働いているのである。

2 「言語は文化である」ということ

語彙体系は、その中心に位置する「形態素リスト」と周辺部に位置する「単語・複合語リスト」からなっていると考えることができる（図3）。

図3　語彙体系



語形と意味の結びつきが非必然的であり、さらに体系内の語形群と語形群との関係も非必然的である、と純粋に言えるのは、「形態素リスト」の中に存在することばについてのみである。「単語・複合語リスト」の中に存在することばとことばとの関係は、すくなからず必然性が認められる場合が多い（注2）。

「単語・複合語リスト」の中をすこし詳しく見ておこう。

ヘラクレスオオカブトムシという昆虫がいる。この昆虫は、中央・南アメリカにしか分布せず、日本では生きている姿を見ることはできない。しかし、我々は［ヘラクレスオオカブトムシ］という語形を聞いただけで、その昆虫の様子を想像することができる。無意識のうちに、［ヘラクレスオオカブトムシ］を、ヘラクレス・オオ・カブトムシと分節し、自分の語彙体系の中にある《へらくれす》《おお》《かぶとむし》と引き当て、その意味の総合体である《へらくれすおおかぶとむし》を想像するのである。

ヘラクレスオオカブトムシとカブトムシはお互いに何のかかわりもなく別々の生物として、現在この世に生きている。しかし、我々人間はこれらの語形を使用すること

によって、それをお互いにかかわりのある生物として認識しているのである。

オオアオゾウムシ・ヤサイゾウムシ・ゴボウゾウムシ・オジロアシナガゾウムシ・アシナガオニゾウムシ・ホホジロアシナガゾウムシ・クロコブゾウムシ・コクゾウムシ・オリーブアナアキゾウムシという昆虫がいる。

これらの昆虫は生物として、まったく独立して存在する昆虫である。しかし、人間はそれらを認識する時、バラバラな存在としてはいない。お互いの共通点を見出して（吻が長く象の鼻のように見える）、その共通の部分に［ゾウムシ］という語形を与えているのである。そして、これらの語形を使用することによって、それをお互いにかかわりのある生物として認識しているのである。

さらに、ヘラクレスオオカブトムシとオオアオゾウムシの「オオ」という部分は、オオアオイトトンボ・オオアオモリヒラタゴミムシ・オオアカバコガシラハネカクシ・オオイエバエ・オオマドボタル・オオダイルリヒラタコメツキ・オオクチキムシダマシの一部分として使用され、さらに、オオアオゾウムシの「アオ」の部分は、アオアシナガハナムグリ・アオカナブン・アオカミキリモドキ・アオゴミムシ・アオハナムグリ・アオマツムシの一部分として使用され、これらはこれらで、また、我々のその虫に対する認識を表明している（注３）。

このように、「単語・複合語リスト」に存在することばは、それを構成する形態素（以下｜　｜で表す）によって、幾重にもわたるグループ化がなされている。語形と語形は、物と物とのかかわり（物そのもののレベルでのかかわりではなく、人間が判断したそのかかわり）から必然的に結ばれており、語形相互に結びつけられているのである。この結びつきの総体は、「形態素による網の目」と言ってよく、「単語・複合語リスト」は、それに覆われている。そして、それは、「文化の網の目」と言ってよい。ひとつひとつの語形は、その他の語形とお互いに関連し合いながら、お互いを支え合っており、総体として、ひとつの完成された秩序を保っているのである。ここにおいて、語形は単なるレッテルではない。それは、我々が森羅万象をどのように区切り・整理しているのかを明示している。森羅万象は言語によって認識されているというのは、このことをさす。

さらに、このことは、言語そのものにとって重大な意味を持っている。

「形態素リスト」に存在することばにおいて、その指示されるもの《意味》と、指示するもの［語形］との結びつきは恣意的である。恣意的であるがゆえに、その結合は常に崩壊する危険性をはらんでいる。「形態素リスト」の中は、常に不安定なのである。「単語・複合語リスト」における「形態素による文化の網の目」は、その安定

度を増すためのシステムでもある。ここでは、ひとつひとつの語形は、その他の語形とお互いに関連し合いながら、お互いを支え合っており、総体としてひとつの完成された秩序を保っているのであった。そして、この秩序は「形態素リスト」にも及んでいる。外側から「形態素リスト」をしっかりと縛り、恣意的結合の崩壊をくいとめようとしているのである。

このようにして、言語は、森羅万象を「形態素による文化の網の目」でがんじがらめに縛り、文化という一連の秩序を保っているのである。

ひとつひとつのことばから言えば、その意味と語形は、文化の網の目によって縛られていると言うことが出来る。とくに、さきに述べた「使用語格納メモリ」に格納されていることばは、その縛りの度合いが強いと言えよう。

ところで、「理解語格納メモリ」と「使用語格納メモリ」は、それぞれ独立して存在しているのではなく、ひとつの語彙体系の中で互いに関連し、有機的に結びついている。そして、「理解語格納メモリ」に登録された新たなことばは、「使用語格納メモリ」の中に触手をのばし、意味上、語形上、なんとか文化の網の目にひっかかろうとする。シャベルは「掘るものである」、蛇のぬけがらは「絹のように光っている」・「銀色をしている」など、旧来の文化によって合理的な解釈を受けることのできたものは、その語形を、その解釈に合うよう改変したうえで「使用語格納メモリ」に入り込もうとする。

逆に、次のように考えることもできる。すなわち、「使用語格納メモリ」に充分に張り巡らされている文化の網の目は、「理解語格納メモリ」の中にも触手をのばし、網の目で掬えるものは掬いあげようとする。シャベルは、「掘るものである」、蛇のぬけがらは「絹のように光っている」・「銀色をしている」、などという旧来の文化にとって合理的な解釈ができるものについては、その語形を改変したうえで「使用語格納メモリ」に取り込もうとするのである。

新たな語形［シャベル］が、新たな物《しゃべる》とともに侵入しはじめた。物としての機能は、従来の物よりも優っているところがあるから、これからも物としては使い続けていきたい（注４）。そこで、人々はなにか自分たちの形態素の中に関連するものはないだろうかと「形態素リスト」に探しにいく。まず｛喋る｝という形態素を探し当てるかもしれない、しかし、これは《しゃべる》とは意味的にまったく縁もゆかりもないことに気づく。そして、次に｛掘る｝という形態素を探し当てて（類音

牽引）さらに〈しゃべる〉は「掘る」ものである（類義牽引）というところへ考えが至った時、人々は強制的に語形を改変してしまう。すなわち［シャベル］が［シャボル］に改変されてしまうのである（注５）。

このようにして、《しゃべる》＝［シャベル］は、《しゃべる》＝［シャボル］となって「使用語格納メモリ」に移行し、使用される機会を待つ。

新たなことば《しゃべる》＝［シャベル］は、「言語は文化である」という言語の本質からくる「形態素による文化の網の目」により、そのままのかたちでの参入を許されていない。なんとか網の目にひっかかるよう、《しゃべる》＝［シャボル］に自己変革を強制されたうえで参入を許されているのである（注６）。ここで「形態素による文化の網の目」は、防御のメカニズムにおいて、主要な役割を果たす。

《じゃがいも》が［ポテト］（注７）という名で、新しい物として我々の森羅万象の一部に入ってこようとした時、ある時代、ある地域では《じゃがいも》を《いも》の一種だと考えた（注８）。さらに、芋は芋だけれども、普通の芋ではなく、《どこか遠く、南方のジャガタラと呼ばれる地域》から入ってきた芋であると考えた。そうして《じゃがいも》を［ポテト］と呼ぶのではなく［ジャガイモ］と呼んだ。

《とまと》が［トマト］（注７）という名で、新しい物として我々の森羅万象の一部に入ってこようとした時、ある時代、ある地域では《とまと》を《なす》の一種だと考えた。さらに、茄子は茄子だけれども、普通の茄子ではなく《赤い》茄子であると考えた。そうして《とまと》を［トマト］と呼ぶのではなく［アカナス］と呼んだ。

これらの場合も、物レベルでの「威光」は強い。《じゃがいも》・《とまと》は物としての参入は許される。しかし、［ポテト］・［トマト］という語形は、文化的な裏付けがない。もともと外来語としての新たな音連続であるから、「形態素リスト」を幾ら探してもそれに見合う音連続はないのである。

このようにして、新たな恣意的結合《じゃがいも》＝［ポテト］・《とまと》＝［トマト］は、防御のメカニズムの中で機能する「形態素による文化の網の目」によって拒否される。

それは、《じゃがいも》＝［ジャガイモ］・《とまと》＝［アカナス］という新たなことばに改変され（注９）、「使用語格納メモリ」に、「単語・複合語リスト」にその位置を得るのである。そして発話の機会を待つ。全き伝播は完成しない。

ここにおいて、語彙体系は自己チェックをおこなう。これらのことばの新たな参入によって、「形態素による文化の網の目」に、なんら損傷はなく、むしろ新たな意味

と語形の参入により、その網の目が補強されたことを確認して更新される。

このように、一般に命名論と呼ばれる分野の一部も、こう考えれば「民衆語源」で説明できる。

これが、防御のメカニズムとしてみた「民衆語源」である（注10)。ここで中心的に働いているのは、「形態素による文化の網の目」であり、それは「言語は文化である」という言語の本質に起因する。

「民衆語源」は、文化という一連の秩序を維持し、保守していこうとする、まさに防御のメカニズムそのものであることがあきらかとなった。

3　「人間はなまけものである」ということ

人間の能力には限界がある。何億バイトか定かでないけれどメモリの数は有限である。さらに、人間は本来なまけものである。その与えられた何億バイトかのメモリを、できれば全部は使いたくない。アクティブなメモリをなるたけ少なく、スリープのメモリをなるたけ多く持っておきたいという欲求を持っている（注11)。

新たなことば《A》＝［H］において、意味《A》と語形［H］の間にはなんの必然性もない。そういう新たな恣意的ペアを覚え込むのは、そのためにスリープ状態のメモリを、その分だけアクティブにする必要がある。これは人間にとって大変な作業なのである。

さきに見た《しゃべる》＝［シャベル］・《じゃがいも》＝［ポテト］・《とまと》＝［トマト］にしても、物として必要なら、この新たな三組の恣意的なペアをそのままの形で、新たな形態素として「形態素リスト」の中に書き込めば良いのである（注12)。しかし、そうはしなかった。「形態素による文化の網の目」の中に入れてしまうことによって、語形を改変していた。それは、すでに見たように、あのように改変することによって、語彙体系そのものの安定度をますますしっかりしたものにしていこうという。言語の側の要求によるものであると考えた。

しかし、この現象は、同時に、人間のなまけもの精神の発露と見ることもできる。すなわち、《しゃべる》・《じゃがいも》・《とまと》を物として導入し、それらを［シャボル］・［ジャガイモ］・［アカナス］と表現しても、「形態素リスト」の中に新たな恣意的結合はほとんどふえていない。｛ホル｝｛ジャガ｝｛イモ｝｛アカ｝｛ナス｝は、もともと自分が持っていた形態素なのである（注13)。

手持ちの形態素をつなげて、新たに単語・複合語を作ることは、指示されるもの《意

味》と指示するもの［語形］の恣意的な組み合わせを新たに覚え込むのにくらべれば、人間にとってそんなに苦労なことではない。新たなメモリは、ほとんど必要としないのである。なぜなら、形態素を組み合わせて新しい語を作るというシステムは、すでに言語の基本的な「文法」と呼ばれる部分に準備されているからである。比喩的に言うならば、このシステムは、データディスクのほうにではなく、システムディスクのほうにすでに記憶されているのである（注14)。

文化という一連の秩序を維持し、保守していこうとする「民衆語源」と呼ばれる防御メカニズムは、「人間はなまけものである」という、言語の使用者たる人間の本質からもたらされるものでもあった。

4　「幼児語源」

小学生のころ、私は音楽の時間にならった「仰げば尊し」の歌詞を、次のように解釈していた。

今こそわかれめ、いざさらば　＝＝＝＝＝＝＝＞　今こそわかれ目、いざさらば

当時の私の語彙の中には、意志の助動詞「む」の已然形「め」という語形はなかった。当然、正確な意味はわからない。そこで手持ちの｛目｝と解釈することにより、《今こそ別れる、その別れ目なんだよ、だから、さようなら》と意味的に納得していた（注15)。新しい形態素を学習しようとするのではなく、手持ちの形態素で処理していたのである。一方、「荒城の月」の歌詞は、次のように分節し解釈していた。

めぐる盃、影さして　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＞　めぐるさ被き、影さして

当時の私の方言に、《帽子などをかぶる》＝［カズク］ということばがあり、それに牽かれ、音連続の中から［カズキ］を切り取った。残った［メグルサ］は、どう切断しても、いくら探しても私のメモリの中にはなかった。そこで、次のように考えた。まだ見たことはないけれど、この世には、「めぐるさ」という帽子のようなものが存在するのだろうと思っていたのである。ここでは、［カズク］に引き付けて聞くことにより、［メグルサ］という語形で指し示されるものまでを存在させようとしていた。ことばによってものがあらしめられようとしていた。自分自身の語彙体系の秩序を維持させようとする、そのためだけにである。

子供は、文化の網の目が十分に発達しているとは言いがたい。しかし、未熟は未熟なりに、その時点その時点で、ひとつの完結した文化の網の目を作り上げている。そして上に見たように、新たな音連続に出会った時、自分がすでに獲得している語に引

き付けて形態素認識し、自分がすでに獲得している文化の枠の中で自分自身を納得させようとしているのである。

ここで働いているメカニズムは、自分自身の語彙体系の秩序維持・保守の働きをしている点で、本質的には「民衆語原」そのものである。しかし、これらは文化を充分に取り込んでいない「幼児」の場合に起こっており、今まで見てきた「民衆語源」とは明らかに違う場合が含まれる。これを「幼児語源」と名づけよう。これについては、稿を改めて述べる。

おわりに

小論では、伝播をはばんできた諸要因を、言語の側に、そしてその使用者たる人間の側に、防御のシステムとして求め、そのシステムの発現の一端として「民衆語源」を見なおしてきた。

「民衆語源」は、「形態素による文化の網の目」にかかる語彙体系の秩序維持・保守の役割をはたしており、まさに自分自身の語彙体系・文化体系を防衛するメカニズムであった。そして、それをもたらすものは、「語彙体系そのものの安定度をますますしっかりしたものにしていこう」という言語の側からの欲求と「スリープのメモリをなるたけ多く持っておきたい」という人間の側からの欲求であり、それらは、「言語は文化である」という言語の本質にかかわる部分と、言語を運用する人間の本質にかかわる「人間はなまけものである」という部分に起因していた。

防御システムの中心に、「言語」そのものと「人間」そのものが存在していることを確認できたのである。

「民衆語源」はまちがったものだ、とりあげるに足りないつまらないものだ、危険なものだという考えは、この学問の関係者からはすでに払拭されている。しかし、方言学・言語学を広く見渡してみると、今だにそういう説は存在する。

小論でみたように、この「民衆語源」は、命名論の一部をもとりこんでしまう、さらには、語彙教育にも応用できる、実は、大きなふところを持っていたのである。まさに柴田（1967）の言うように、「なにか生みだす、“生きた”語原」なのであった。

注

注1　ことばの伝播を防御の観点から再検討し、そのひとつとして、「民衆語源」について考えるのが本論の主旨であるが、一方、私は、伝播を推進するものとして

「威光」を対置させる。この「威光」について充分に分析されなければならないと考えている。言語外の威光についてはもちろん、言語内に潜む威光について、さらに深く考える必要があろう。注4・注6参照。

注2　このふたつのリストの間には、すでに「文法」という言語システムが介在する。つまり、形態素どうしをつなげていく時、どちらを先に、どちらを後にという順番決定のためのルールである。あとにあげた例を用いて言えば、カブトムシオオヘラクレス・オオカブトムシヘラクレスなどではなく、ヘラクレスオオカブトムシが正しいとされるためのシステムである。注14参照。

注3　ここであげた昆虫名の例では、通時論的に、つまりこの場合、進化論的に虫と虫との間に「物のレベル」での必然的な（遺伝的）かかわりがあるのかもしれない。また、そういった説に従って、きわめて体系的な命名がなされている分野である。我々の一般の語彙システムに比べれば、非常に見事に体系化がなされている部分ではある。

注4　ここで述べた物としての優位。これなどは言語外的「威光」の一種である。

注5　［ベル］と［ボル］との間に「類音牽引」と呼ばれる力が働いている。また、《しゃべる》と《掘る》との間の意味的な近似性も指摘でき、ここには、意味の類似したものが牽き合うという「類義牽引」と呼ぶべき力も働いていると見ることができる。注9・10参照。

注6　「理解語格納メモリ」に新たに入ってきたことばのうち、このような合理的な語源解釈の可能なものは、それが不可能なものよりも「使用語格納メモリ」に移されやすいだろうと考えられる。「使用語格納メモリ」に移されるということは、伝播が完成する要件が整うということである。伝播を推進するものとして「威光」を見た場合、まさに、これらのことばは言語内的な「威光」を持っていたと言うことができる。この学問は、おもに言語外の「威光」について考えてきた学問であるが、こう考えれば言語内的な「威光」についても充分分析されなければならない。

注7　［ポテト］・［トマト］という語形で侵入しはじめたかどうか確定できない。しかし、［ジャガイモ］・［アカナス］でなかったことは確かで、ここではそこに意味がある。

注8　ここでのこの認識のありようが、まさに文化であり、その認識を［～～イモ］という語形によって表明しているのである。「じゃがいも」を林檎の一種と考える文化もある。

注9　ここでは、《じゃがいも》が《いも》との類似性に、また《とまと》が《なす》との類似性に牽かれている。「類義牽引」と呼ぶべき力が働いていると言うことができる。注5・10参照。

注10　「類音牽引」・「類義牽引」の力がともに働いたものが《しゃべる》＝［シャボル］の例であり、従来、いわゆる「民衆語源」と呼ばれてきた現象である。一方、《じゃがいも》＝［ジャガイモ］・《とまと》＝［アカナス］の例は、「類義牽引」と呼ばれる力のみが働いていると考えることができる。注5・9参照。

注11　さまざまな鳥の啼き声（これらは、ひとつひとつが音連続である）、人間は、これをそのままの形で、テープレコーダーのように覚えようとはしない。「聞きなし」という手段をとる。「センダイムシクイ」の出す［チチヨチチヨビー］あるいは［チヨチヨビー］という音連続を「焼酎一杯ぐいー」と聞きなしたり、「ホトトギス」の出す［キョッキョキョッキョッキョ］という音連続を「特許許可局」と聞きなしたりするのである。なんの意味も持たない音連続を分節し、分節されたそれぞれの音連続に、我々の持っている類音の形態素を引き当てる。それによってなんらかの意味を持つ繋がりをもった音連続として認識し、覚えやすくしているのである。「民衆語源」が、語彙体系の秩序維持・保守の役割をはたしているのに対し、「聞きなし」にはその側面はない。もっぱらメモリの節約という役割のみをはたしている。

また、人間は、夜空の星を見、満天に輝く星をそのままの形でフィルムに定着させるようなことはしない。「見立て」という手段をとる。星座という、ある意味を持つ繋がりとして見立て（分節し）、さらに、文化の網の目に組み込むため命名という方法をとる。こうすることにより、覚えやすくしているのである。ここでもメモリは大量に節約できる。

また、このようにすることによってはじめて、人間は、もの（啼き声・星）を秩序あるものとして認識できる。ことばによってものがあらしめられるのである。

注12　げんに共通語では｛シャベル｝・｛トマト｝が形態素として登録されている。

注13　｛ジャガ｝は、はたして形態素といえるかどうか。また［シャボル］の［シャ］の部分はどう説明するか。

注14　人間の言語には次のような階層的（分節的）システムが用意されている。

音素を組合せて拍を作る・音素を組合せて形態素を作る・形態素を組合せて単語を作る・単語を組合わせて複合語を作る・単語、複合語を組合わせて文を作る・文を組合せて文章（談話）を作る。

この階層的システムによって、有限の音によって無限の思想を表現できるのである。有限のものを階層的に組み合わせていくことによって、無限の情報を伝達することを可能にしているこの組み合わせのシステムが、広義の「文法」である。

注15　「同音牽引」と言ってよい。

／参考文献／

柴田武（1967）　「民衆語原について」　『国語学』第69集

柴田武（1969）　『言語地理学の方法』　筑摩書房

馬瀬良雄（1969）「言語地理学ー歴史・学説・調査法ー」『国文学解釈と鑑賞　方言研究のすべて』第34巻第８号　至文堂

W．A．グロータース（1970）　「鳥瞰的広域言語地図と微細言語地図」『方言研究の問題点』　明治書院

W．A．グロータース（1977）　「社会と方言地理学」『日本語と文化・社会』第２巻　三省堂

徳川宗賢（1978）　「単語の死と生・方言接触の場合」　『国語学』第115集

徳川宗賢（1979）編『日本の方言地図』　中央公論社

馬瀬良雄（1980ａ）『上伊那の方言』　上伊那誌刊行会

馬瀬良雄（1980ｂ）「神主の方言をめぐる虫たち」『佐藤茂教授退官記念　論集国語学』　桜楓社

馬瀬良雄（1981）　「方言分布から見た「混淆」」『藤原与一先生古稀記念論集　方言学論叢Ⅰ　方言研究の推進』　三省堂

小林隆（1981）　「同音衝突の意味的側面――高田西部言語地図を中心に――」『国語学』第126集

謝　辞

「形態素による文化の網の目」について考えるきっかけを作ってくれた、高橋直人氏に感謝する。

（たかはし・けんじ　高知女子大学助教授）